

日本発生生物学会

インホーメーション・サーキュラー

№. 3

1969年4月

日本発生生物学会

大会関係で若干の変更がありますので御注意下さい。

内 容

和文誌の件について	P 1
欧文誌についての報告	P 2
才 2回大会について	P 3
事務局からのお願い	P 4
告 知 板	P 5

日本発生生物学会

京都市左京区北白川追分町
京都大学理学部植物学教室内
(郵便番号 606)

和文誌の件について

発生生物学会和文誌発刊については、昨年の運営委員会によって、原案の作成を古谷雅樹、柳島直彦、岡田節人に依頼されました。運営委員会各位の意見を参考に入れつつ、この三氏が現在準備されました原案は次のようなものであります。これを原案として、次回の運営委員会で討議されることとなりますので、現在の段階で会員各位にお知らせすると共に、原案に関するご意見を、事務局、または上記の三氏いずれか宛てに、どしどしお寄せ下さい。

1. 会の機関紙としての和文誌を年一回刊行する。
2. この雑誌の名称は「発生生物学誌」(以下、単に機関紙と略す)とし、ナンバーは旧実験形態学会以来のものを引きつぐ。
3. 内容は、年次大会の要約(旧実形誌と同体裁、印刷一頁、これ以上のものは超過頁代を請求する)、年次大会の際に開催されると思われる small meeting, symposium などの記録(責任者から原稿提出を求める)、学会の運営、行事についてのアナウンスメント、報告、その他とする。
4. 年次大会で講演を行なわなかった会員にも、あまねく大会講演要約と同体裁の報告の誌上参加を求める。これによって、本機関紙が全会員に公開されたものであることを明らかにし、機関紙たるの機能の発揮に務める。
5. 本機関紙の研究報告は、一種の short communication と考えられるから、同内容の full paper を他誌に発表するのは自由である。

以上の機関誌は全員にあまねく公開されるもので、これによって、会員各位の現在の研究上の興味と関心を、お互いに知り合うことを意図しています。しかし、我が国における発生生物学に対する関心の高まりは、会員内はもとより、会員外にも大きく、また、我が国発生生物学関係の研究水準は、極わめて高いものがあります。このような現状に應ずるため、発生生物学会編として、別に不定期刊行物を発刊します(以下刊行物と略す)。この刊行物の内容として、次のようなものを考えています。

1. 発生生物学会編とし、わが国の研究者に執筆を依頼して、150~200頁程度の刊行物を不定期(但し、一応、年一回を目標とする)に刊行する。
2. 内容は、かなり高度に学術的なものとし、たとえばアメリカの Growth Sympon-

sium 程度を目標とする。

3. 各冊は、それぞれ別のタイトルとし、それに関係ある原稿を集める。原稿の依頼先は会員には限らない。
4. 印刷、発行は某書店が行なうが、会員には発行の都度アナウンスして、希望者は割引価格で求められるようにする。
5. 機関紙、刊行物ともに、同一の編集委員があたる。編集委員としては、会の内規による九名は多すぎると考えられ、五名程度が適当で、残りは空席とする。

欧文誌についての報告

編集主幹 楢山正雄

会則の付記事項にしたがって、昭和43年の欧文誌はさしあたり Embryologia の誌名で10巻を完結することになっておりました。佐藤忠雄氏が編集主幹として鋭意その編集に当られ、Embryologia の誌名の終りを飾りました。欧文誌配布希望の会員諸氏には4月上旬にお届けしたと存じます。

今年度から誌名が Development, Growth and Differentiation と変わり、新しい機構に移ります。会員諸氏の御鞭撻と御援助をお願い申し上げます。

現在、DGDの御寄稿論文は11篇あり、順次レフェリーを回覧、定稿ずみのものや定稿化しつつあるものがあり、才1号は予定よりやくおくれますが、5月中には発行したいと思えます。おくれをとりもどして、今年末までには才4号まで完結するよう努力いたします。多くの優れた論文をお寄せ下さいますようお願い申し上げます。とくに、微生物系、分子生物系の論文もふやして、発生生物学の流れに沿いたいとお願いいたします。まだ、この面で原稿をいたゞいておりませんので、是非とも御協力をお願い申し上げます。

印刷は従来東崎印刷でしており、最初、編集委員会でも東崎で続けるとの意向でありましたが、種々検討の結果、印刷所を変えて荒川印刷にたのむことに大体決定しました。本文や写真の見本刷りを何回か荒川で試み、その結果が良好なのでこれにふみ切りたいと思えます。従来の活字組版の印刷でなく、IBMの欧文植字機によりますので、字体が漱米なみになり、仕上がりが早くなる利点があります。校正は楽になるようですが、活字組版の場合と多少勝

手がちがいますので、御寄稿の方々の御理解を得て成功させたいと思います。

原稿のいわゆる〆切はもうけませんので、どうぞ随時、続々原稿をお寄せ下さるよう重ねてお願い申し上げます。

第 2 回 大 会 に つ い て

大会委員長 木 戸 哲 二

1. 日程の件：サーキュラ№2でお知らせしましたが、一部変更させて載きます。その理由は大学紛争にもかかわらず多くの講演申し込みのあったためで、講演される方は次の講演持時間変更には充分御留意下さい。

	オ1日(5月31日)	オ2日(6月1日)
午 前	8.50 } 一般講演 12.00	8.50 } 一般講演 12.00
昼 食		
午 後	13.00 } 一般講演 16.00 } 総 会 18.00 } 懇 親 会 19.30	13.00 } ディスカッション ミーティング

2. 講演持時間変更：70題を超える講演が予定されておりますので、1題12分 講演3分討論にさせて載きます。サーキュラ№2で20分の持時間としており、出来るだけ充実したものとするため持時間の短縮はさけたいと思いましたが、2日間という時間の関係で止むを得ませんでした。また会場数を多くすることにも問題が多く、講演を比較的早くから始めねばなりません。御協力お願い致します。時間不足のところはディスカッション、ミーティングなどで、おぎない下されば幸いです。
3. 講演要約の原稿について：原則的に1頁印刷になるように希望しましたが、出来るだけ

2頁印刷になるような原稿の方が希ましいとの本部からの要請がありました。記述要項についてはサーキュラー№2を御参照下さい。

4. デスカッション、ミーティングについて：現在のところ次のような案がよせられており、大会委員会と関係者の間で、具体化が検討されております。これらのうち、すでにオルガナイザーが決定されておるものは、そのお名前を記入しておきましたが、その他の分についても実現可能となるよう交渉を進めております。積極的に参加下さいますように。

- i) 受精から初期発生の問題　とくに核一細胞質関係を中心として
- ii) 分化の研究に関して組織培養系の可能性……（論点として ㊶現在可能な点
㊷将来の可能性・㊸微生物などの系を用いた場合の可能性）
- iii) 昆虫の細胞の培養と分化（遺伝研　黒田）
- iiii) 発生免疫ならびに免疫的手法（金沢大　右田・京大　萩原）
- v) 植物ホルモンの問題点（大阪市大　増田）
- vi) 陰花植物の形態形成

5. 宿舎の件について：まだ申し込みの余地があると思われまますので、出来るだけ早く、サーキュラー№2にあげました各宿泊所にお申し込み下さい。ただし、その中にあげました（1）金沢市旅館協同組合のアドレスは、金沢市本多町三丁目10の26と変更になりましたから御注意下さい。

6. プログラムは大会前におとどけます。また講演要旨は大会当日受付にてお渡しします。

7. 懇親会について：ビールとつまみは用意しますが、夕食御希望の方は別に200円で大会初日午前中に受付にお申し出下さい。

事務局からのお願い

1. 会費納入について

会の財政状態は芳しくありません。昨年度会費の納入率は60%程度ですのでお払い込みに御協力下さい。お払い込みは、和政両誌希望者3,000円、いずれか一方の希望者1,600円とし、郵便振替（口座番号：京都15350　加入者名　三菱銀行出町支店）にて、通信欄に必ず発生物学会会費と御記入下さい。

2. 会費変更について

欧文誌 (D. G. D) が季刊となりますし、会が発足して後に今日までの会の収支を検討した結果等から考えて会費を一部変更する件について検討されております。会員に実質的負担の増加することは考えられておりませんが、会の運営を順調にし、会員に会を利用していただくためにはある程度の会員数の増加なり会費納入率の増加の面で御協力戴かねばなりません。総会で提案する予定ですので、出来るだけ多くの方の御出席をお願い致します。

3. 今秋発刊の発生生物学誌について

才2回大会の講演要約等を中心にしたものになりますが、このサーキュラーのはじめのべられている案にしたがって、誌上参加の短報形式のもの募集も考慮されましたが、今回の大会の講演数等からみて、また現在の会の経理から考えて、今回は誌上参加の件は一応ペンデインにいたします。運営委員会で充分検討の上総会におはかり致します。

告 知 板

この度本学会の団会長が International Society for Cell Biology (President : M. CHEVREMONT) の名誉会員に Dalcq, Rünstrom 教授らとともにおされました。

御承知のようにこの協会はパリに本部を置き国際的に権威の高いものであり、発生生物学とは深くつながりのある組織です。